



## 会員の声

### Eldridge M. Moores 名誉教授を悼む

正会員 小川勇二郎・辻森 樹

世界の地質学界で指導的な役割を果たしてきた、カリフォルニア大学デービス校名誉教授、IUGS元副会長のEldridge M. Moores (エルドリッジ・M・ムーアズ)氏が2018年10月28日(現地時刻早朝)亡くなられた。80歳であった。巡検のリーダーとしてデービス校の同僚諸氏と学生らを率いてカリフォルニア州のシエラネヴァダの地質を案内していたが、宿泊していたQuincyの林間のコテージが燃え、命を落とされた。まことに痛ましい限りであり、世界にとっての大きな損失となった。ご冥福をお祈りするとともに、ご家族、ご同僚の方々に心から哀悼の意を表します。

氏は、1938年アリゾナ州に生まれ、カリフォルニア工科大学からプリンストン大学へ進み、博士の学位を所得した後、長い間カリフォルニア大学デービス校で教鞭をとった。その間、オフィオライトの構造地質学およびテクトニクスの研究と、北米コルディレラ、テチス海域のオフィオライト、海洋プレートの構造や発達史、アルプスヒマラヤ造山帯などの研究に生涯をささげた。また、大学、学会活動でもその指導的な役割を果たし、アメリカ地質学会会長、雑誌Geologyの編集長などを歴任し、さらに国際地質科学連合(IUGS)の副会長として活躍し、IUGSと万国地質学会(IGC)との関係をつける難題を解決し、その統合化を推進した。アメリカ合衆国と世界の学界における重鎮として、今後もさらなる活躍が期待されていたが、亡くなられたことは、惜しみてもあまりある。

氏は、日本では、構造地質学とテクトニクスの教科書(Structural Geology 1992初版、

2007第二版、およびTectonics 1995)の著者(Robert J. Twissと共著、W.H. Freeman & Co.)として広く知られている。また、国際深海掘削(ODP)のテクトニクスパネルの議長としての活躍を知る人も多いことと思われる。岩石学分野では、都城秋穂氏との間のいわゆる「キプロス論争」(オフィオライトが島弧に由来するか、それとも中央海嶺の産物か?)の中央海嶺派のリーダーとして、Ian G. Gassらとともに論陣を張ったことは、記憶に新しい。キプロス島のトルードスオフィオライトなどからのボニナイト発見などから、現在ではオフィオライトには、島弧性のものも多数存在する、と知られるようになったが、産状や構造からは、拡大軸としての活動も認められ、両方の要素を持っているとされるようになった。本人は、地質構造の詳細



写真左) 2008年8月のオスロでの第33回万国地質学会議のIUGS総会において副議長として会議をリードした。右) 2004年フィレンツェで、奥様と。

な記載、産状の組み合わせ、発達史的な解釈などから、テクトニクスを総合的に説明しようとして、オフィオライトのベンローズ会議を二度にわたって主宰した。この間、同僚・学生らとの多くの研究論文を発表する傍ら、特集号の編集、シンポジウムの主宰など、幅広い活動を行い、デービス校退官後は、国家的なさまざまな審議会やプロジェクト審査、答申などの重鎮として活躍していた。2018年11月のGSA年会においても、プレートテクトニクス50周年の記念シンポジウムを開く間際であったが、その実現を見ずに亡くなられた。同僚諸氏のショックと悲しみは大きい。北米西海岸や北米大陸全体だけでなく、ア

ジア、南極、ヨーロッパ各地域の地質とテクトニクスに造詣が深く、とりわけ、1991年のSWEAT仮説の提唱(Geology)は、アメリカ大陸西部と南極大陸東部の地質の連続性を紐付け、超大陸復元を決定づけたことで大きなインパクトを与えた。また、Encyclopedia of European and Asian Regional Geology 1997を編集し(Rhodes W. Fairbridgeとの共編、Springer)、日本の項目も監修した。その第一線の研究に基づいた幅広い視野、自然への深い理解と洞察により、たえず総合的理解を求めていた。また、若い研究者や留学生への深い愛情にあふれ、地質学を文化の一つに高めた功績はまことに著しい。アメリカ西海岸における、氏の活躍は、日本人研究者らとの交流にも及び、環太平洋地域全体の理解が、世界の地質の理解に結びつくことを示した。それは、前出の二編の教科書を読むとよく分かる。さらに、ご夫婦で編集に携わった一般書籍のBedrock: Writers on the Wonders of Geology(2006年、Trinity University Press)にも氏の自然観がよく現れている。

氏と接したことのある者は、その学会活動、研究・教育における影響力だけでなく、彼の一挙手一投足から、人類社会全体へ分け隔てない深い愛情を感じたことと思われる。特に、文化、歴史、芸術に造詣が深く、大学のオーケストラでチェロを弾き、進んで諸外国の研究者、学生らと交わった。その温厚・篤実な人柄は、多くの人々に父親のようだ、地球科学における伝導師のようだ、と慕われてきた。このように、氏は、世界の地質学や文化をリードしてきた。日本では、弟子であり同僚であるYildirim Dilek, John Wakabayashi, Robert Hildebrandなどを通じて、分野によっては、密接なかかわりあいを持っている研究者も多い。謹んでご冥福を祈りたい。

参考: <https://www.ucdavis.edu/news/geologist-beloved-campus-citizen-eldridge-moores-dies/>